平城京下層で縄文時代の河川を発見

（仮称）大森遺跡・平城京跡（左京五条四坊十五・十六坪）　大森町

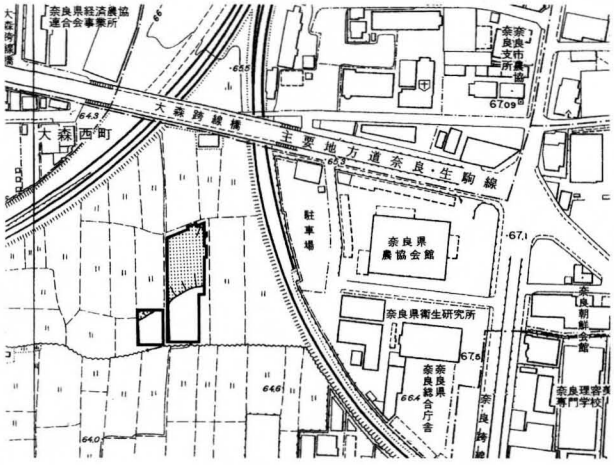
ＪＲ奈良駅から南へ500m程の場所に広がる水田地帯では、奈良市によるＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業が進められています。この地域は、平城京の条坊復原で左京五条四坊の北半部と五条五坊の一部にあたります。平成13年度より発掘調査を実施しており、奈良時代の道路や橋、宅地に伴う建物・塀・井戸・土坑等が見つかっています。また、古墳時代以前の遺物や遺構も見つかったことから、平城京が造られるよりも前の時代の遺跡が広がっていることもわかってきました。こうした古墳時代以前の遺跡を「大森遺跡」と仮称しています。

縄文時代の河川　事業地の北東部で平成14年度に実施した東四坊大路の調査では、奈良時代の遺構を検出した層の下で、縄文時代の土器や石器を含む河川を確認しました。今回、その西側で実施した東西２箇所の発掘調査区で、この河川の続きを確認しました。

河川は東から西に流れており、幅は約30m、深さは最も深いところで約2.5mあります。河川堆積土は上下２層に大きく分けることができます。上層は橙灰色細砂土層で、弥生時代前期の土器が出土しました。下層は灰色砂礫層で、縄文土器、冠形土製品、石鏃、石器製作時に生じた剥片等が出土しました。出土した縄文土器は小さな破片を含めると約2,500点を数えます。

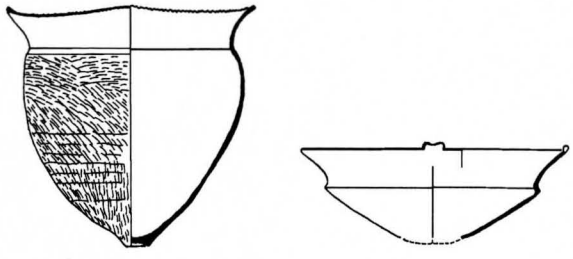
なお、灰色砂礫層は種や実・葉を多く含む泥質砂層をはさみ、当時の植生・環境を明らかにするため、この層に含まれる花粉の分析や種実・葉の同定を行いました。この結果、川辺の低地にはサワグルミ・ムクノキ・トチノキ等からなる林が、微高地にはイチイガシを主にシイやクリを含むとするカシ林が形成されていたことがわかりました。なお、サワグルミ・トチノキ・イチイガシ・シイ・クリの堅果は食料として利用できます。

今回の調査で発見できたのは、縄文時代の河川のみですが、この付近ではドングリのアク抜きをする為の、水晒しに適した場所があったものと考えることができ、今後の周辺の調査では、こうした縄文時代の遺構の発見が期待できます。

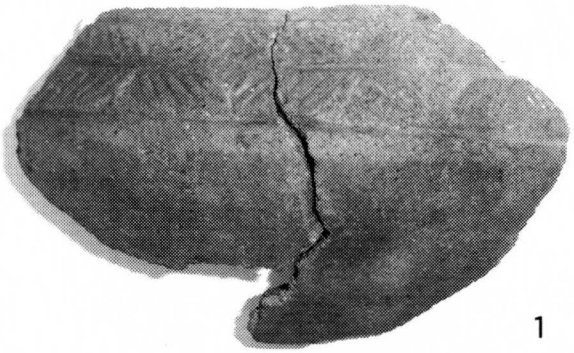


調査位置図（1/5,000）
アミ掛け部分は縄文時代の河川の範囲を示す

出土した縄文土器　河川から出土した縄文土器のうち、詳細な時期のわかるものはすべて縄文時代の終わり頃である晩期（3,000～2,400年前）のものです。通常、縄文土器といえば、土器の表面に縄紋を美しく飾ったものを思い浮かべます。しかし、近畿地方の縄文時代晩期は、土器の表面を貝殻もしくは板状工具によって調整します。「縄紋のない縄文土器」を主に製作する時代です。出土した土器の種類は下の図に示したような、滋賀里遺跡（滋賀県大津市）の出土資料で代表される深鉢や浅鉢で占められています。深鉢は、一般に内外面にススや炭化物が付着することが多く、主に煮炊きに使われたと考えられています。浅鉢は食物を盛り付ける器と推定されています。

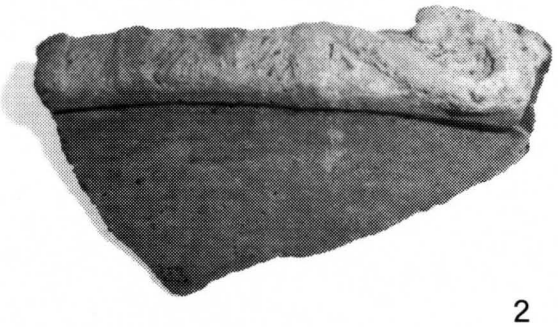


縄文時代晩期の近畿地方の深鉢（左）・浅鉢（右）



1

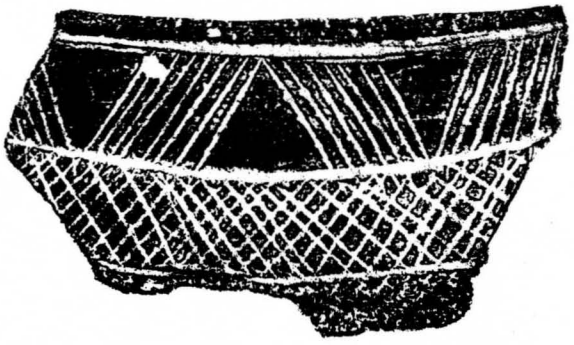
「橿原式紋様」で飾られた浅鉢



2

北陸地方の影響がみられる浅鉢

3



「橿原式紋様」に類似した線刻で飾られた浅鉢

特筆できる土器には、レリーフまたは線刻で飾った土器や、他の地方の影響をうけたとみられる土器があります。上の図に示した土器のうち、1、3の浅鉢は、橿原遺跡（奈良県橿原市）の出土資料で代表される、平行する沈線あるいは刻み目を施した沈線をはさんで三角形のくり込み紋を加えた「橿原式紋様」を飾っています。1は、底が丸いサラダボウル形で、外面には三角形に刳り込んだ紋様に、七宝紋風の紋様を交えた紋様帯が巡ります。3は、頸部が直立し、その外面にはジグザクに施した斜線紋を、肩部の表面には斜格子紋を線刻しています。頸部の線刻で、三角形の紋様が表されており、「橿原式紋様」に類似するものと考えられています。ともに表面は丁寧に調整されています。

「橿原式紋様」は縄文時代晩期では初め頃のみに使用される紋様であることが指摘されています。また、この紋様は石製品や木製品の飾りとしても用いられ、北は福島県から南は鹿児島県まで広く伝わっていることがわかっています。

2の浅鉢は、御経塚遺跡（石川県野々市町）の資料で代表される北陸地方の浅鉢と類似しています。口縁部は粘土紐と縄紋で飾っています。この他に、大洞貝塚（岩手県大船渡市）の出土資料で代表される東北地方の土器の影響を受けたものも出土しています。

このように「橿原式紋様」の伝播や他の地方の影響をうけた土器の存在は、縄文時代晩期の人々の交流が、広範囲であったことをうかがわせます。また、広域的に土器の年代を考える上でも、重要な手がかりとなっています。

発行　奈良市教育委員会　平成19年7月